

課題とビジョン

資料 4

【課題】

① 児童・生徒数の減少

二宮町立学校に通う児童・生徒数の推移と予測

平成 30 年 4 月 1 日現在 児童数 1,227 人、生徒数 635 人

昔は？ 児童数 1,797 人、生徒数 702 人（昭和 25 年）

ピークは？ 児童数 3,203 人、生徒数 1,612 人（昭和 55、60 年）

これからは？ 児童数 571 人、生徒数 320 人（平成 62 年、半減）

② 単級化

①により、学校によっては、単級化（各学年 1 クラス）が起こる

一色小学校 2020 年（児童数 178 人）

山西小学校 2040～45 年（児童数 201～220 人）

二宮西中学校 2055～60 年（生徒数 104～122 人）

6 学級はクラス替えができない学校規模であって、切磋琢磨できる集団の観点、教職員のバランス良い配置の観点などからみて、教育上課題があるので適正規模に近づけることの適否を速やかに検討する必要がある

（望ましい学級数）

・小学校

全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置したりするためには、1 学年 2 学級以上が望ましい。

・中学校

小学校と同様の理由により 1 学年 2 学級以上が望ましいことに加え、免許外指導をなくしたり、全ての授業で教科担任による学習指導を行ったりするためには、少なくとも 9 学級以上を確保することが望ましい。

・法令上、学校規模の標準は、学級数により設定されており、小・中学校ともに「12 学級以上 18 学級以下」が標準とされている（特別の事情があるときはこの限りでない）。

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（平成 27 年 1 月 文部科学省）

③ 施設の老朽化と統廃合の必要性（施設面から）

各学校は、昭和 35 年～昭和 55 年に整備されており、耐震補強は実施済みではあるものの老朽化が進んでいる。

「二宮町公共施設再配置・町有地有効活用実施計画」（平成 30 年 3 月 二宮町）

④ 学校毎の現状と課題（別添参考資料 3 参照）

⑤ 学校の果たす役割

- ・義務教育段階の学校は、児童生徒の能力を伸ばしつつ、社会的自立の基礎、国家・社会の形成者としての基本的資質を養うことが目的。
- ・このため、単に教科等の知識や技能を習得させるだけではなく、児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付させることが重要。
- ・そうした教育を十分に行うためには、一定の規模の児童生徒集団が確保されていることや、経験年数、専門性、男女比等についてバランスのとれた教職員集団が配置されていることが望ましく、一定の学校規模を確保することが重要。
- ・同時に、小中学校は、各地域のコミュニティの核としての性格を有することが多く、防災、保育、地域の交流の場等、様々な機能を併せ持っている。また、学校教育は地域の未来の担い手である子供たちを育む営みでもあり、まちづくりの在り方と密接不可分。

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（平成 27 年 1 月 文部科学省）

【ビジョン】

- ・学校規模の適正化の検討は、児童生徒の教育条件の改善の観点を中心に据え、学校教育の目的や目標をより良く実現するために行うべきもの。
- ・このため、学校規模の適正化や適正配置の具体的な検討については、行政が一方向的に進める性格のものではない。
- ・学校教育の直接の受益者である児童生徒の保護者や将来の受益者である就学前の子供の保護者の声を重視しつつ、地域住民の十分な理解と協力を得るなど「地域とともにある学校づくり」の視点を踏まえた丁寧な議論を行うことが望まれる

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（平成 27 年 1 月 文部科学省）

- ・児童生徒の学習環境を改善する観点から小中一貫教育を行うとともに、学校規模の適正化や学区の再編など小中一貫教育校の導入に向けた検討を行う。

「二宮町小中一貫教育校導入検討会における検討内容報告」

基本的な考え方

- 小中一貫教育校の形は、当面は分離型。
- 小中一貫教育校（分離型）グループを 2 つ作る。
- 単級の学校はつくらない。
- 現在の小学校区に最低 1 つの学校（小中どちらでも）を置く。
- 統合や校種の変更による改修は行うが、短中期的には新設は行わない。
- 地域との関係を十分考慮する。
- 財政的な負担はできるだけ少なくする。